

レガスタ大運動会

「東京レガシースタジアム2025」2日目の10月18日、国立競技場内のトラック＆フィールドで「レガスタ大運動会」が開催されました。晴天の下、家族連れや友だち同士など約200人が赤組、白組の2チームに分かれて、バブルサバイバル、マットフラッグス、綱引き、パン食い競争、大玉送りの5種目に挑戦し、競い合いました。

日本マラソン財団スポーツレガシー事業チャリティ・アンバサダーのM高史さんがMCを務め、スペシャルゲストとして女子800m元日本記録保持者の徳田由美子さん、アジア大会2018女子マラソン日本代表の田中華絵さんが参加しました。また、駒澤大学体育会応援指導部「ブルーペガサス」が熱い応援を繰り広げ、日本陸上競技連盟のキャラクター、アスリオン、渋谷区観光協会のSHIBUYA♡HACHIが大会を盛り上げました。

参加者は4つのグループに分かれて、大玉送りを除く4つの競技を順番に回り、最後に参加者全員で大玉送りを行いました。競技の様子を紹介していきます。

バブルサバイバルは、安全に楽しく体を動かせる大きなバブルボールの中に入り、リュックサックのように背負って装着し、押し相撲のように相手を四角いコートの外を押しだす競技です。4人で対戦し、残った1人が勝ち。激しくぶつかり合っても、押し倒されて転んでも、弾力のあるバブルボールのおかげで痛くありません。子供だけでなく、大人も夢中になって楽しんでいました。

東京都江東区からお父さんと一緒に参加した男の子は「ぶつかると、跳ね返るところが、すごくおもしろかった。一日中、やっていくらい。国立競技場はとても大きいと思いました」と話していました。

マットフラッグスは、砂浜で行われるビーチフラッグスをもとにした競技です。2人で助走した後、陸上競技の聖地、国立競技場の「走り高跳び競技用のマット」にダイブして、先にフラッグをつかみ取った方が勝ちになります。

埼玉県から家族3人で参加したお母さんと娘さん2人は楽しそうにこの競技をしていました。お母さんは「私は、明日、東京レガシーハーフマラソンに出場します。ランナー受付で国立競技場に来るついでに、娘のために大運動会に参加しました。でも、私自身が童心に返ってしまって」と満面の笑み。小学5年の姉は「勝ったよ。マットに飛び込むとき、気持ちよかったです」、小学2年の妹も「マットに飛び込むのは怖かったけど、フワフワしていて面白かった」と話していました。

綱引きは団体戦の定番。チームの団結力が勝利を引き寄せます。制限時間1分で50mの綱を引き合います。審判役の担当者の「頑張っていこう！」という掛け声に、参加者が「おー！」と応じて、競技がスタート。一進一退の攻防や逆転劇が多く、どのグループも盛り上がっていました。

ここで異彩を放っていたのが、おそろいの緑のTシャツを着た中年のおじさん集団。話を聞くと、都内の50代中心のランニングチームでした。メンバーの1人は「『パン食い競争をしたい』『国立競技場のトラックを走りたい』という理由で、25人で参加しました。東京レガシーハーフマラソンにも10人参加します。最近は運動会がないので、楽しかったです。家族連れが多くて、少々、場違いだったですかね」と笑っていました。

パン食い競争もイメージ通りの競技。走る途中でつり下げられたパンを手を使わずに口で取って、さらに走ってゴールします。走るのが遅くともパンを上手に早く引きちぎれば、逆

転勝利の可能性があります。スタート直後に小さいハードルの下をくぐるので、子どもに有利で、大人と子どもで競争して、しばしば子どもが勝っていました。

パンをくわえてゴールしてきた男の子は「パン食い競争を初めてやりました。めちゃくちゃ難しかった。特に、パンを口でつかむところがなかなかできなかったけど、とても楽しかった」と、笑顔いっぱいに語っていました。

葛飾区から親子で参加したお母さんは「子どもの学校の運動会でやったことはありましたが、パンを口でくわえるときの力の入れるポイントが難しかったです。国立競技場のフィールドに降り立ったのは初めてで、ここでパン食い競争ができる、いい思い出になりました」と話していました。

最後に4つのグループが1つになり、全員で大玉送りを行いました。バブルボールを大玉に見立てて、地面に落とさず、頭上で前から後ろにパスしていく、1番後ろに着いたら、今度は前にパスしていく、先に前にボールが戻ってきたチームが勝ちです。赤組、白組とも一歩も退かない大熱戦となり、白組が2勝1敗で競り勝ちました。

文京区からお母さんと参加した小学3年の女の子は「大玉は重くて、ずしーんときたけど、エイって、次の人に回すのが面白かった」と話していました。

競技終了後の閉会式で赤組、白組の総得点の集計結果を発表。MCのM高史さんが「白組優勝、赤組準優勝」と告げると、白組から歓声があがり、紅組から大きな拍手が起きました。参加者全員が一つになってイベントを終えました。